

連載⑤③ 地域密着を進める
女子大学の人づくり
 宮城学院女子大学 長谷部 弘
 学長

女子大学が目指す「人づくり」というテーマのもと、今回は宮城学院の建学の精神と教養教育という設立時以来のミッションが実際に学び果立っていった卒業生にとつて実際どのような意味を持ったのか、という問題を取り上げてみましょう。

一般的に、大学の教育活動

の成果の評価は実は難しいことだと言われています。それは、大学という高等教育機関としての建て付けに理由があるようです。大学とはそもそも、学術の専門家としてアカデミア（学界）に属する研究者たちが、その専門研究の世界に若い世代の学生たちを引き込み、確実な答えのない世界でより確実な答えを見出す知恵や技量を伝え、身につけてもらうことを目的として教育活動をする教育組織です。建学の精神も教養教育（リベラル・アーツ）の原則も、そんな大学の建て付けとワンセットのものであります。

記憶しておられる方も多いと思いますが、日本ではかつて、大学には社会に出てすぐに役立つような専門教育が求められていませんでした。高度経済成長を通じて世界的な産業の競争優位性を誇った日本企業の多くは、「大学教育に期待しない」独自の企業文化を作り出していったからです。結果として、熾烈な受験競争と大学間格差に裏打ちされ、大学の社会的価値はしばしば大学卒業時に瞬間的に発生する一括労働力市場で、社会的選別コストの削減装置としての役割しか期待されなかつたのです。

ところが、グローバル化とシヨンの進展とともに産業構造も労働力市場も雇用環境も大きく変化した結果、日本の大学は、今度は企業での社員教育コストを削減するための「専門教育」を実施することが強く求められるようになりました。結果として、大学は現在即戦力な専門性を身につけるための「職業教育」機関への変貌を余儀なくされつつあるとも言えます。特に、

建学の精神と教養教育

三年間のコロナ時代が収束し、ポスト・コロナの時代に入りつつある現在、即戦力を求める社会的要請はまったく自明の現実となつてしましました。データ・サイエンスや情報系を筆頭とする理系学部や、法律や経営といった実学系の学部・学科に受験生が集中するのは当然かもしれません。そのなかで、大学は、求められる「即戦力」育成教育という課題とアカデミックな研究教育組織という建て付け

との間で試行錯誤を繰り返している、というのが現状でありましょう。そんな中で、最近、宮城学院の教育の成果を明らかにし

てくれる興味深い研究成果が公にされました。戦後の宮城学院女子大学・宮城学院女子短期大学の卒業生を対象とした大規模なアンケート調査に基づき調査分析です（片瀬一夫・天童睦子「宮城学院卒業生の初期ライフコース：女性の高等教育とキャリア展開への社会的アプローチ」、キリスト教文化研究所『研究年報』第55号、2021年）。高学歴女性のライフコースに焦点をあてた調査研究が少ない

中、貴重な研究成果です。興味深いのは、現在40代から60代までの卒業生が共通して回答していることとして、応用力は相対的に十分ではないが、生涯学び続けるための基礎となる能力や技量、専門分野の基本的な見方・考え方は8割以上が身につけているとしている点です。さらに、年齢の高い世代になるほど、大学における「キリスト教人格教育」に対する熱心さが大きく評価されている点も軽視することができません。

今後の宮城学院女子大学が目指す教学活動の方向を模索する上で、卒業生の人生において、宮城学院が行ってきた建学の精神と教養を重視する教育が、専門分野の基礎的な教育とならんで大きな意味を持つている、という事実は見逃すことのできない大切なことを示しているように思われます（続く）。



長谷部 弘（はせべ ひろし）
 1955年生まれ。福島市出身。東北大学経済学部、経済学研究所修了後、同学部助手、教養部講師、国際文化研究科助教授を経て、99年に経済学研究科教授。2021年定年退職し東北大学名誉教授。23年4月から宮城学院女子大学学長。専門は日本経済史。博士（経済学）。